

母と子のための

信心増進物語



第四十八回

法の中にこそ常住の仏の法身がある

私たち凡夫の目は、何事も形や表面的なことしか見えません。しかし、特にご信心では、その《内面に秘められた本質》を見抜くことが求められます。御本尊は、単なるお文字ではなく、生きてましますみ仏であり、御題目は仏さまの御魂と思いなさい、と教わるのはそのためなのです。

今回は、ご信心の眼で拝見すれば、形ある仏さまよりも仏さまの説かれた教え、つまり法こそに仏さまの不滅の命が籠められていることを知ることが大事ということを教えて下さるお話です。

《仏教説話に学ぶ》

佛立信者の 人生観

作・三河 信吾

「形のある仏と形のない仏」という話

むかし、仏さまが祇園精舎におられた頃のことでした。コーサラ国に二人の初心の仏道修行者がいました。二人はある日、親しく仏さまを拝みたいと願い、舍衛城に向かいました。

この二つの国の間には、人の住家もない荒野が続いていました。その時は乾期で日差しも厳しく、道中のあちこちにある井戸は枯れていて、二人は暑さと喉の渇きに耐えられなくなりました。

仏さまの戒律を守る者と守らない者

幸いに途中の古井戸にわずかばかりの水があるのを見つけて、これを飲もうと釣瓶を落として汲み上げたところ、よく見ると水の中にはボウフラやその他の小さな虫がたくさんいました。仏さまの定めた戒律の一つである不殺生戒を守るべき仏道修行者としては、たとえ小さな虫けらとはいえ、この水を飲むことはできません。

一人が言いました。

「遠くから仏さまにお目にかかりたいと苦しい思いをしてここまで来たのに今日、はからず

戒律を守った連れは天人と生まれ変わる

水を飲まなかったため、死んだ一人は、仏さまの戒めを守った功德によって、直ちに三十三天に生まれ変わりました。そして花や香を持って天から下って、仏さまを礼拝して御前に座りました。

もう一人は、水を飲んで一時は精気を漲らせたものの、それから何日か歩き続けて疲れはてて、やつのことで仏さまのところまでたどり着きました。彼はさっそく廣大無辺の輝きを放たれる仏さまのお顔を拝して額ずき、涙を流しながら、

「仏さま、私には一人の連れがございました。彼は道中に疲労と飢えと渇きのために、ついに命を落としました。どうぞ仏さまには彼をお哀れみください」と申し上げました。すると仏さまは、

「おお左様か。それなら私はよく知っている。そこにいる天人は、お前の連れであったはずだ。彼は戒めを守ったので天に生まれ変わり、お前より先に私のところに來ることができたのである」と仰せになり、さらに、

「お前は私の肉身を見に来たのか。多くの不浄の集まりから成っている、この肉身はやがては死によって消えてしまう、この無常の身体を見に来たのか。なぜお前は私の説いた法を見ようとはしないのだ。法の中にこそ清らかな常住の仏の法身があるのだ。お前の連れは、この法をしつかりと見たのだ。そうして仏の法身を見ることができたのである。お前は何というたわけ者であろうか」

それから仏さまはやさしい言葉に変えられて、「お前は私の形ばかりを見て、私の教えである戒めを守らなかつたのだよ。お前は今、私を見たと思っても、私はお前を見ない。それに引き換え、たとえ私からどれほど遠いところにあつても、私の戒めをよく守つたお前の連れは、天人と生まれ変わって、現にお前の目の前におるではないか」と、懇ろに教え諭されました。そしてさらに、

「よく仏道を学び、仏のみ教えを守るならば、現在も未来も諸願は成就するであろう。学ばず戒めを守らなければ、今生も来世も何事も成就はしないのだ。教えを学ぼうとするなら、多くを聞くがよい。そして教えの内容を深く理解することに徹しなさい。そうすれば道を踏み外すようなことはないのだよ」

今回をもってこの仏説シリーズを終わります。ご愛読ありがとうございました。

御教歌

めに見へずして有るものをしらしめて
木画の二像 文字即如来

(罰あるはずの事・扇全二十八卷八四頁)